

一八八二年三月某日

〔あらゆる宗教——調和〕

数日の後、タクール、聖ラーマクリシュナは南神のシヴァ堂の階段の上で前三昧状態になって坐っておられる。時間は午後四時か五時ころのことで、校長はそのそばに坐っていた。

その少し前、タクールはご自分の部屋で床に寝具をひろげて休んでおられた。現在はまだ、タクールのお世話をする人が誰もおそばには住んでいない。フリダイが出て行つてから、タクールは何かと御不自由であった。カルカッタから校長が来たので、タクールは彼と話をしながら、聖ラーダーカーンタ堂の向かいのシヴァ堂の石段のところへきて、坐っておられたのである。ところが堂をご覧になつて、いるうちに、突然、前三昧状態になられてしまったのである。

タクールは、宇宙の大実母と語り合つておられた。

「大実母、誰もが自分の時計は正しいと言つている。クリスチャンも、ブラフマ協会の会員も、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒も、皆、自分の宗教は正しいと言つて。でも大実母、誰の時計も正しくない。誰が真にあなたのことを知り得ようか。けれど、熱心に誠をこめてあなたを求めれば、お恵みをいただいて、どんな道を歩いてもあなたのもとに着くのだ。大実母よ、キリスト教徒が教会でどんなふうにして神に呼びかけるのか、いつか見せておくれ！ けれども大実母よ、わたしが教会のな

かに入っていったら、人は何といふかな？ 大さわぎになるだろうね？ もうカーリー神殿に入
てくれないだろうね？ だから、教会の入口のところから眺めさせておくれ」